

大館の歴史散歩

戊辰戦跡を歩く①

大館城落城 その後

八月二十二日、二井田に本陣を構えていた南部軍総大将楢山佐渡は、午前十時過ぎ大館占領報告を受け、四羽出から大館城に入った。しかし佐渡は大館には長く留まらず、翌二十三日には大館を出て四羽出に宿陣、大館の警備を向井、桜庭両隊に命じた。

大館軍が城を守り狐軍奮闘していたとき、友・援軍はどう対処していたのであろうか。友軍の茂木隊は早口村に陣を構えており、一時は岩瀬まで軍を進めたが、落城と聞くや早々と軍を引き揚げていた。

また大館苦戦の報告を受けた



藤琴方向から見た荷上場

津軽藩では、新援軍として三隊百七十余人の派遣を決定、うち

二隊（鉄砲頭対島仙蔵隊、同藤田留兵衛隊）が、午前七時には長走に到着していた。しかし街道にあふれている大館からの避難民を見て、釈迦内まで状況確認のため後退していた同藩の先着援軍対島寛左衛門と善後策を協議、秋田藩への道義を通すために

対島寛左衛門隊を白沢に宿陣させ、他の隊は碓ヶ関へ引き揚げることに決定した。しかし大館軍不利の状況が進むにつれ、ついに対島寛左衛門隊も二十三日には碓ヶ関へ引き揚げ他隊と合流した。津軽藩からの援軍として、開戦以来大館軍とともに戦い抜き奮闘してきた対島寛左衛門の目には、故郷・津軽はどう映ったのであろうか。

当時、津軽藩からの援軍の行動に対して「津軽の日和見」という言葉があったが、寛左衛門に対しては当てはまらない表現である。

一方、大館城を自らの手で焼き払い、「佐竹遷封以来開きたることのない」随時門（西側の

門）から脱出した大和は、綴子へ向かう途中、大館預り本藩士天神庄蔵に、久保田表の鎮撫総督府へ第一回目の戦況報告を命じた。また綴子路上の軍議で防備の場所を小繫一帯に、本陣の場所を荷上場と決定し、荷上場の菊池某宅に本陣を構えた。その夜は深夜まで軍議を開き、とりあえず集まった兵で根本、小林二隊を編成し、小繫山及び米代川原の警備につかせた。また兵器弾薬と兵糧の補充、戦況報告のため家中目付石山哲郎を二回目の使者として久保田に送った。

二十三日正午ごろには、遅れていた諸隊長も参集し、夕方には三百人余りになっていたが、総員が集結を終えたのは二十四

日であった。

二十三日夜に、大和は軍再編会議の軍議を開き、根本（順）隊・小林隊を小繫村街道正面に、二階堂隊を大沢口に、根本（幾）隊・中田隊を小繫本道加護山寺に配置するなど諸隊の配置を定め、翌二十四日早朝までに配置を完了することに決定したが、完了したのは二十五日であった。二十五日、南部軍総大将楢山佐渡は綴子に本陣を構え、本道と大沢口から小繫を攻撃する作戦を立てていた。小繫付近には、大館城を落とし意気上がる南部軍斥候の姿が見られるようになり、両軍の動きがわかるようにならざるを得なかった。

さて、戦況報告のため二十三日に久保田へ向かった石山哲郎が、明徳館に置かれた鎮撫総督府に到着したときには、北部戦線応援のため佐賀藩隊と、同藩支藩小城藩隊あわせて六百余人の投入が、既に決定していた。そしてその総隊長が、神宮寺口での戦闘に参加していた参謀副役佐賀藩隊長田村乾太左衛門であった。田村の元に転陣命令の伝達使者が着いたのは、二十四日であった。その夜のうちに転陣準備を完了した田村は、二十五日早晩、五人の隊士を斥候として荷上場へ急行させ、戦略のための情報収集を開始した。いままさに、当時の国内で最高の装備を誇っていた佐賀藩隊が、北部戦線に投入されようとしていた。

市役所史跡探訪会

私の本棚

中央図書館新着図書

『額田王の暗号』

藤村由加著 新潮社

雄渾かつ優美な歌で知られる万葉女流歌人「額田王」。その歌に隠された暗号とは……。1300年の時を隔てて、今その解読にいとむ。



- ◆天上の青〔上・下〕（曾野綾子）
- ◆金魚の眼が光る（山田正紀）
- ◆銀行検査部25時（高任和夫）
- ◆百合の心（辻原登）
- ◆ダイヤモンドヘッドの虹（夏樹静子）
- ◆幸福な猫の淋しい背中（ヒロコ・トムー）
- ◆ヒノマルの四角い太陽（パルバース）
- ◆タブー（山崎洋子）
- ◆道化師の恋（金井美恵子）
- ◆野蛮な来訪者〔上・下〕（パロー〔他〕）
- ◆黄昏にくる人（立松和平）
- ◆神が忘れた町（トーマス）

- ◆イワナの銀平海へゆく（村田千晴）
- ◆地図にない島へ（武田英子）
- ◆ピデオ新発見！（かわなかのぶひろ）

10月のテーマ関連図書コーナー
『ためになるはなし』
親子読み聞かせ会
毎月第1金曜日 午後2時30分から
中央図書館の休館日
10月21日、25日、11月3日、12日、18日